

1. 江戸時代の城 彦根城

1600(慶長5)年の関ヶ原の戦いの後、近江国の北部を中心とした領地の統治を将軍から任された井伊家は当初佐和山城を居城としていましたが、徳川幕府は佐和山城を廃し、それに代わる新たな城の築城を命じました。佐和山城の西側に広がる琵琶湖に面した平地が水陸路の要地として地方を統治する拠点置くに相応しいとされ、築城の場所は、平地の中にある独立丘陵の彦根山に決められました。

新たに築城された彦根城は、石垣を備えた堀により彦根山とその麓の部分を区画した第1郭、第1郭の周囲に築造された第2郭で構成されています。第1郭と第2郭を合わせた城全体は、北側が松原内湖に面し、それ以外は大規模な堀と石垣、櫓によって明確に城外と区切られており、その外観は周囲の街区(城下町)から隔絶されたものとなっていました。第1郭の山上に

は、ここが統治拠点であることがわかるように象徴的な天守が建てられ、堀と石垣、櫓で囲われていました。統治を行う大名と上級家臣(重臣)は城の中に一体となり集住していましたが、大名の御殿は第1郭の彦根山山麓、重臣の屋敷群は第2郭と異なる区画に造営されました。御殿の一角には重臣が参集し合議する部屋があり、大名と重臣が合議しその結果をもとにして大名が意思決定を行う政治の場にもなっていました。また、大名と家臣との結びつきを強固なものとする年中行事といった儀礼・茶の湯や能楽、競馬といった文武にわたる文化的行事を行う場も統治のために必要とされ、御殿内の大広間や能舞台、第2郭の庭園(玄宮園)が造営されました。このように、地方統治の拠点である彦根城は、周囲の街区から隔絶され、その内部に統治のため必要となる複数の構造物・施設が集約された一体的な空間として形作られていました。



写真T-1 彦根城天守

2. 彦根城の歴史

1604(慶長9)年から開始された第1郭部分の工事は、公儀普請として幕府から奉行が派遣され、近隣諸国の大名を動員して進められ、1606(慶長11)年頃に終わりました。第2郭の部分は、大坂の陣の後、井伊家によって拡張、整備され、1622(元和8)年に城全体が完成しました。その後、井伊家は改易されることなく16代にわたって明治維新まで領内1箇所にものみ存在する城となった彦根城を拠点として与えられた領地を治めることになりました。

江戸時代が終わり、彦根城は県庁や陸軍の施設として使用されましたが、1878(明治11)年に城内の建物が取り壊しされることに決まり、山崎曲輪にあった三重櫓や、黒門等の解体が順次進められました。天守が解体されようとする頃、民意を聞き入れた大隈重信が北陸巡幸の最中に明治天皇に保存を奏上し、これを受け入れた天皇が保存する命を出したことにより以降の建物解体が中止されました。その後の第二次世界大戦の戦禍もくぐり抜けて、彦根城は現在まで受け継がれることになりました。

現在、彦根城跡は特別史跡に指定され、城内に残された天守は国宝に、その他に残る5棟の建物は重要文化財に指定されています。

3. 彦根城の世界的な価値

日本の江戸時代は、徳川幕府の將軍から大名に領地を預け、その土地の政治を任せる仕組みが築き上げられていました。この世界的に見て例を見ない政治の仕組みにより、江戸時代は約250年間安定した社会が継続した時代となりました。

当時の大名を代表する井伊家の居城であった彦根城は、地方を統治する拠点であり、築城から400年以上経過した現在でも城全体を周囲の街区と明確に区切る堀と石垣、櫓、区切られた内部にある2つの郭とその中に造られた天守、御殿、重臣屋敷群、庭園といった地方の統治を行った色々な施設が極めて良い状態で保存され、独特の外観を造り出しています。このような特徴を持つ彦根城は、江戸時代の政治の仕組みを知ることができる稀な見本として、世界的な価値を有しているのです。



写真T-2 空から見た彦根城跡

文化財保護課 上垣 幸徳